

ハイブリッドからモノカルチャーへ —タイ北部農村社会における HIV/AIDS 感染者組織の生成と転回—

日野 智豪（上智大学アジア文化研究所）

本発表はタイ北部チェンマイ県近郊の農村社会における HIV/AIDS 感染者組織の生成と転回を抗 HIV ウィルス薬治療普及の影響という視点から検討するものである。

HIV/AIDS 感染者組織とは、HIV/AIDS 治療法や社会的な対応についてお互いに持つ情報を交換し、さらにその他の困難な状況にある感染者、発症者たちを救済する相互扶助組織のことであり、そもそもチェンマイ県においては、1990 年代初頭、チェンマイ市内の貧困地区で自然発生的に出現、近郊の農村社会においては、「未亡人の会」というかたちで発足した。その組織化の背景には①貧困、②社会的烙印、③医療体制の不備があった。

発表者が文化人類学的定着調査をおこなった S 郡、M 郡では、キリスト教の牧師が HIV/AIDS による多数の死者のため、週に一度の礼拝すらおこなえなくなるといった状況を憂い、未亡人たちと協働し、感染者、発症者たちを見舞い、話をすることで悩みを分かち合うことから組織活動は展開されたが、仏教徒の多い同地区では、キリスト教徒も生きるために「瞑想」をおこなうなど宗教を超えたハイブリッドな状況も見受けられた。

医療体制に目を転じると、90 年代中葉、タイ政府の伝統医療復興運動に郡立病院、非政府組織が連動し、HIV/AIDS 感染者を巻き込んだ全体的医療の肯定を経て、2001 年ポピュリズム的医療政策（30Baht 政策）の実施、02 年、2 年後の国家政策に先駆けた非政府組織のパイロット・プロジェクトによる抗 HIV ウィルス薬治療の一般的普及により、HIV/AIDS 感染者の効果的治療の可能性が広がっていった。

以上のような医療状況の改善が HIV/AIDS 感染者組織にどのような影響を与えたのか。本発表においては以下の 4 点を指摘する。

- ① 組織活動の変容（精神的活動から経済的活動へ、活動に対する衝突）
- ② 組織内部におけるパワー・ポリテックス（組織リーダーのカリスマ性の欠如、感染者男性の排除）
- ③ 郡立病院との関係性の強化（医療従事者への依存）
- ④ 個々の活動の強化（情報獲得手段の拡大、感染者組織を超えた活動）

このように見えてくると、HIV/AIDS 感染者組織の転回は、個々の HIV/AIDS 感染者の医療化の過程であり、地域開発の渦に巻き込まれていく過程でもあり、また、自助、自律概念、排他性の喪失の過程であると考えられる。つまり、HIV/AIDS 感染者組織は反体制をスローガンとして掲げながらも、医療化され、地域開発に巻き込まれるという矛盾に直面しているのである。本発表では、さらにこのような状況のもとでの HIV/AIDS 感染者組織の存続事由、存続の可能性について考察し、郡立病院との相互扶助関係を軸としたより単一的な関係性の構築がその鍵となることを述べる。